

次郎長

次郎長翁を知る会
会報 第25号
平成21年9月15日発行
発行所 〒424-0821
静岡市清水区相生町6-17
(財)静岡観光コンベンション協会
清水事務所内
TEL (054) 352-7331
発行人 字 竹内 宏
編集人 田口 英 爾
印刷所 (株)ニシガイ
TEL (054) 352-2188

日本一の茶のみなと一〇〇年

明治四十二年（一九〇九）清水港は横浜港を抜き、お茶輸出全国一となる。静岡茶を清水港から——次郎長の悲願は、没後十七年によりやく実った。

明治になって切った張ったの世界から大転換した次郎長は、晩年を「お茶」に投入した。

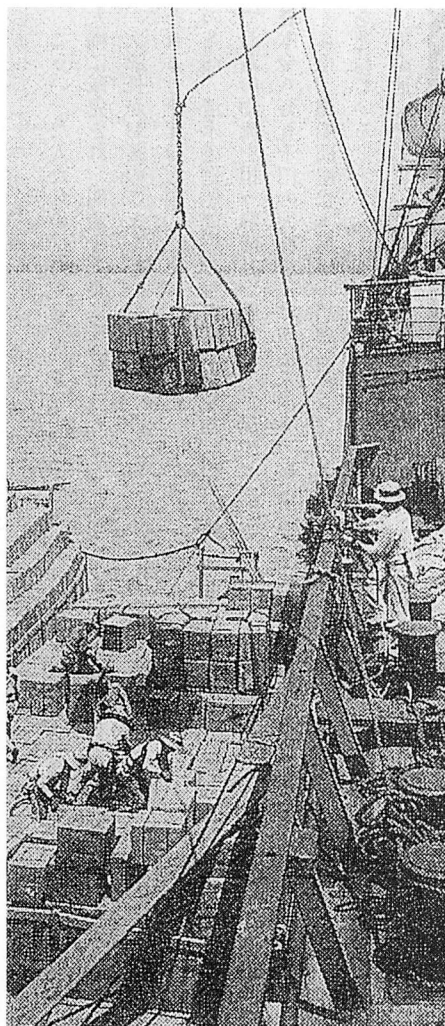
あの富士裾野開墾もそうであつたし、横浜通いをして静岡茶を横浜に運ぶ物流をつくらうとしたのも清水港をお茶のみなにするためであつた。

明治四十二年（一九〇九）、今から一〇〇年前の

この年、清水港にとって開港以来の画期的な出来事が起こった。

清水港からのお茶輸出が、初めて横浜港を抜き全国一となったのである。

世界市場を独占していた中国茶に追いつき追い越せと、日本茶輸出が始まった頃、清水港は開港



輸出茶の本船積取。昭和初期の清水港

場ではなかった。静岡茶は清水港経由で横浜に運ばれ、「お茶場」で加工され米国に輸出された。

清水港が小樽、四日市、門司、博多などともに開港されたのは、次郎長の死後六年たった明治三十二年（一八九九）であつた。

さらに、日本郵船神奈川丸がお茶を積んで清水港を出帆、清水港からのお茶輸出が始まったのは明治三十九年（一九〇六）、それから三年を経てようやく横浜を抜き、清水港は日本一の茶のみなとなったのである。

次郎長にとっていわば悲願が実ったこの年、明治四十二年六月十二日、次郎長十七回忌の法要が梅蔭寺で営まれた。三代目おちょうを囲んだ参列者の写真は本誌14号にのせられたが、ここに再掲する。（次頁）

よく知られるように、十七回忌の前後、報知新聞静岡版に「俠客寡婦物語」と題しておちょうさんの回顧談が連載され話題を呼んだ。

その中に、生前の次郎長の横浜行が語られている。次郎長が横浜で定宿としていた神風樓のことである。神風樓は岩亀樓と並ぶ横浜一、二の旅館だが経営者山口久米蔵は次郎長のサポーターであつた。ちように静岡県令が過激な奈良原繁の時代、次郎長が自由民権運動弾圧の飛びっちょりで井宮監獄に収監された時のことを、おちょうさんはこう語っている。

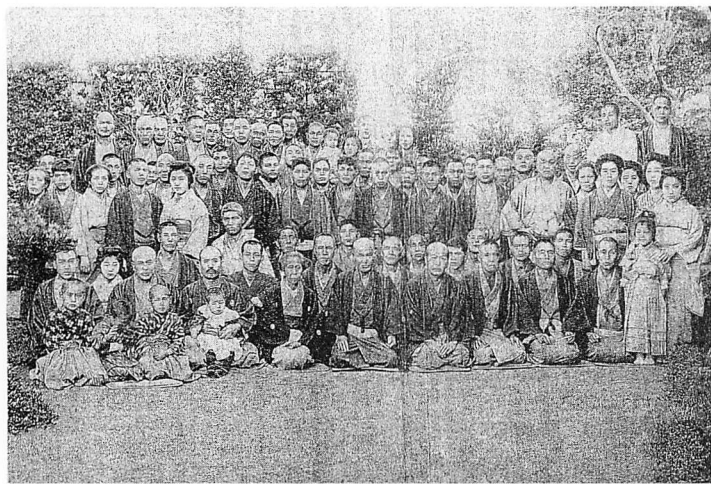
「神奈川の久米蔵という人なんかの尽力は通常ではありません。此の方は、その頃神風樓の主人で長五郎とは兄弟のようにしていただすから、『おれが一肌脱がにやらん時が来た』とこう申

しまして……」

こういった人たちの尽力や県令の交代で刑期を大幅に減免され、明治十九年に釈放された。

次郎長がお茶のことを熱心に行っていたのは、それより十年ほど前のことで、横浜の商人、静岡の茶商、清水港廻船問屋の後継者たちを結びつけてお茶の物流を担う静隆社が明治十三年誕生した。資本金八万五千円の大株主には、清水出身の松下くらや、廻船問屋松本屋の小川藤兵衛などが名前を連ねている。

横浜通いをしていた頃、次郎長が神風樓に顔を



明治42年6月12日 次郎長17回忌参列者 前列黒の羽織姿がおちよう

見せると、女将が、「駿河のご飯の好きな親分が来た」と言う話も、おちようさんの回顧談だ。

ちなみに神風樓は明治四十四年火災で焼失、山口久米蔵の後継者仙之助は箱根富士屋ホテルを創設した。

明治十九年仮出獄した次郎長は、巴川畔の住居を処分し、向島（清水受新田）の波止場に、船宿末廣を開業した。その場所は日の出埠頭、浪漫館付近で、三年ほど前、日本平頂上にあつた海野孝三郎顕彰碑が移されて建っている。

四メートルもあろうかという巨大な石碑は、先にもふれたが、明治三十九年、日本郵船神奈川丸が初めて清水港から茶を輸出したのを記念し、その功労者海野孝三郎を顕彰して建てたものである。清水港からのお茶輸出は、この年を皮切りに、

明治三十九年 五、一八四千ポンド

四十年 七、四一七

四十一年 一〇、五四五

四十二年 一四、五二三

と急伸し、四十二年には横浜を抜いて日本一になったのである。開港場に指定されてから、ちょうど十年の年月を要している。

そのきっかけとなった海野孝三郎の記念碑と背中合わせに、大きさは遥かに小さいが、「次郎長宅跡之碑」が建っている。次郎長が晩年営んだ船宿末廣の復元した建物は港橋のところにあるが、実際にあつたのは、浪漫館の傍のこの石碑の場所なのである。

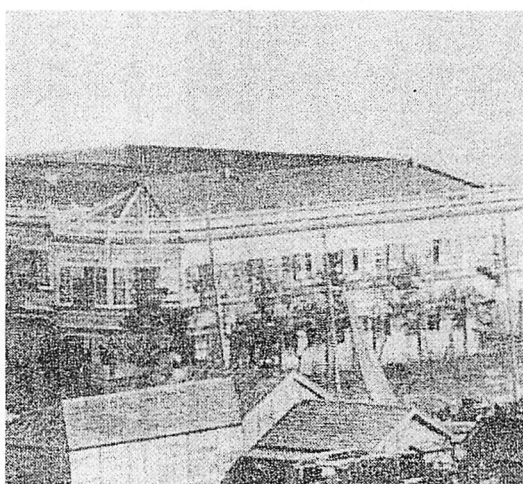
お茶と次郎長の碑が背中合わせの近くに建って

いるのは偶然のことではあるが、決して無関係ではない。

清水・静岡の代表的民謡「茶っ切り節」と「次郎長音頭」はそれぞれ北原白秋と野口雨情の作詩であるが「唄は茶っ切りぶり、男は次郎長」「お茶じゃすませぬ次郎長音頭」とお茶と次郎長という言葉が詠みこまれている。清水港にとってそれは合言葉といつてもいいだろう。

繰り返すようだが、今年は清水港が日本一の茶のみなどになってからの一〇〇年という節目の年である。静岡茶の歴史、横浜と清水港の歴史、関わった次郎長の史実、それらを改めて見なおすべき時であろう。

ちょうど五十年前に出版された「日本茶輸出百年史」によれば、「茶の輸出に関係したおもな港は横浜・神戸・長崎・清水・四日市の五港であった。



横浜神風樓（明治期）

そしてこの日本茶輸出港の栄枯盛衰の歴史は、ひとくちにいつて、横浜港から清水港への輸出イニシアチブの移行という点に焦点を絞ることができる。」とされている。

横浜港は今年開港百五十年で湧いている。清水港は開港百十年だが、日本一の茶のみなどになって百年という年であることを見落としてはならないだろう。

次郎長が「茶」に目を向けるきっかけとなったのは何か。

一言でいえば徳川旧幕臣たちとの交流である。

明治元年七月二十三日、徳川慶喜公が新政府により謹慎を命じられ、水戸から静岡にやって来た。お供について来たのは五十人ばかりの精鋭隊士である。将軍護衛の精鋭隊は後に新番組と改称されマリンパークの海野孝三郎顕彰碑。後方は浪漫館ビル



るが、隊長格松岡萬が率いて牧の原に入植する。

この松岡萬が、山岡鉄舟を次郎長に引き合わせるのである。松岡萬は次郎長と余程親しくしていたらしい。鉄舟が亡くなった直後の明治二十一年九月の日付で、次郎長に宛てた手紙が、おちょうさんの子孫入谷家に残されていた。内容は鉄舟の

平成二十一年春の日帰り旅行

身延山、天照教、次郎長開墾跡を訪ねる

四月二十七日(月)春の次郎長史跡探訪ツアーが行われました。花の時は終わっていましたが、しだれ桜で有名な身延山参拝から始まりました。朝から快晴に恵まれ、バスはおよそ四十名で出発です。

身延山は、天田愚庵が戊辰の役で行方不明になった父母妹を探しながら全国を歩いたとき、もしかこの身延山に来ていたのではないかと参詣帳を調べに立ち寄ったといえます。

日蓮宗総本山の身延山久遠寺は、およそ七百年前、日蓮大聖人が晩年を過ごされた霊山で、当地の領主南部六郎実長公の招きで五十三歳の時入山しています。

私たち一行のバスは、総門をくぐり山門(日本三大門の一つ)を横に見ながら山を登り、大本堂裏の駐車場に着きました。ここからエレベーターで昇ると眼前に五重塔がいきなり目に入ります。

遺産の処分という内輪の相談事だ。

次郎長が明治七年という早い段階で富士裾野開墾に着手したのは、松岡や中条金之助ら牧の原入植組から、茶生産の重要性を知ったからであろう。激変する時代の潮流の中で、次郎長は果敢に子分たちと生きる道を探ろうとしていたのである。

ベンガラ塗りの五重塔は、薬師寺の塔のような、きらびやかさはありませんが、自然の中にとけこみ堂々としています。五月十三日に行われる落慶法要の準備が出来ていました。

大本堂前でこの日のため興津からわざわざ来られた丸茂僧正にお逢いし、建物の中をご案内していただきました。

まず大本堂の天井に舞う加山又造画伯の描かれた黒龍に出会いました。私は昨年の秋の京都研修で花園会館に宿泊したとき、妙心寺法堂の天井の龍を思い出し、心あられる境地でした。

美しい自然に包まれた久遠寺は、五重塔と共に忘れられない感動で一杯です。

以前は総門より徒歩で階段を一步一步登りながら本堂にたどり着きましたが、現在は道も整備されて車で簡単に本堂に行けるのですから、参詣も



秋の一泊旅行は愚庵故郷いわきへ(お申込み、問合せは☎三五二七三三一一)

◎戊辰戦争で行方不明となった父母妹を探して遍歴した天田愚庵、終の住居となった庵で、愚庵研究会の人たちと交流。翌日は次郎長音頭の野口雨情生家へ。

●日 時 十一月九日(泊)十日
●参加費 三万二千元
●申込締切 九月三十日

楽にできます。

身延山より西の方角に七面山があります。七面山は女人禁制でしたが、法華經の信者である徳川家康公の側室、真珠院お万の方が自ら白糸の滝で七日間の水垢離をして登山したことによって、女人禁制の解かれたお山で、今では参詣者の宿泊施設もあるそうです。

こんなに変化した身延山や七面山を見たら、お万の方もまっ青になってしまうことでしょう。

山を下り、いよいよ有名な富士宮焼きそばで昼食です。ここで竹内会長と合流し、神道天照教本



春の次郎長史跡探訪ツアー 於 神道天照教社 平成21年 4月27日

部の境内に残る次郎長手植えの桜見学です。花は終わっていましたが、大きな桜の木の前で記念撮影です。

この頃になると快晴の空の雲行きが変わりポツポツと雨が降り出し、途中で道を間違えたりしたハプニングもありましたが、富士市大湖の次郎長の開墾地、さらに富士市今泉の法雲寺（辻の勝五郎墓所）から吉原宿の鯛屋旅館に到着。

御主人で歴史に詳しい佐野大三郎さんから吉原宿の話を聞き、おみやげ物を求めて帰途に着きました。



春の次郎長史跡探訪ツアー 於 身延山久遠寺 平成21年 4月27日

バス乗車するとき、店主のおもてなしで一人ひとりに火打ち石で送って下さいました。その縁起でしょうか、バスが走り出してしばらくすると、急に雨あがりの海の方に虹が大きく半円を描いて出ているのです。車内はいつの間にか童心に戻ってにぎやかになりました。きっと次郎長翁が喜んで一行の中に入っていたのではないのでしょうか。こうして春のバス旅行の一日は楽しく、予定通り終わりました。いつも思い出に残る旅行を、ありがとうございました。（天野 香）

編集室から

●お茶輸出百年祭が盛大に開かれてから五十年。茶商ウォルターヘリヤ氏が清水市名誉市民に推されたのも五十年前です。

●会報25号は、清水港が日本一の茶輸出港になって一〇〇年を特集しました。

●四月から復活した船宿末廣での「次郎長巷談」は、毎月第三土曜日13時30分から。八月の第三土曜は終戦記念日の15日、「次郎長の後継者たち」と題して開かれました。

●昭和十七年、次郎長五十回忌の時に、梅蔭寺でとられた写真には、おちようさんの曾孫に当る学生服姿の一人の若者が写っております。入谷篤治さんは、昭和二十年八月十六日、誤った出撃命令のため戦死しました。

●南国土佐の太平洋海岸夜須町には、四百人を超える若者が散った大事故の慰霊碑が建ち、犠牲者の名が刻まれています。

●64年たった今でも、この話をするとき、悲痛な感を抑えることができません。